佛教研究　第四卷　第三、四號合併

親鸞聖人著述總論

橋川　正

こゝに親鸞聖人の著述を總括して概論するに當り私の取る方法は客觀的考察を試みんとするのであるから、總論としてはその職能の全分を盡してゐないことを豫めことわつておかねばならぬ。而して著述について別に系統分類を立てず、製作の年代順によつて筆を進めて行かうと思ふ。然しながら若しこゝに力點の置かるべきところを問はれるならば、躊躇なく顯淨土眞實敎行證文類卽ち普通に敎行信證と呼ばれ、更に敎徒にとつて親しき名をいへば御本書と稱せられるものと、三帖和讃を擧げることが出來る。この二大代表作物に著述の中心を求めることが出來ると思ふ。

顯淨土眞實敎行證文類は卷頭に提示せられてゐるやうに、眞實之敎たる大無量壽經に基いて、その所說の開顯に力めたものであつて、抑へ難き感激を內に潛めつゝ宗敎の眞實を求めてやまなかつたのである。この文類に就いては近頃種々の議論が立てられて居るが、第一には製作年代である普

通に說くところでは　化身土卷本に正像末の年時を考定する際、元仁元年なる年號が見えてゐるので、元仁元年五十二歲の製作とする。所が後序に記されてゐる天皇の謚號や、他の著書との年代の關係や、本書に記載されて居る佛滅年代の違算や、惠信尼書狀の發見等を根據として、その製作は元仁元年といふが如き坂東地方經廻中の早い年代でなく、歸洛後少くとも仁治三年、七十歲頃迄に完成されたのであらうとの推論である。その論證は何れも尤もな說であつて首肯すべきものであるが、然らば何故元仁元年なる年代が紛れ込んだのであるかゞ問題である。鷲尾敎導氏等は、覺信尼の生誕を考定して、卽ち覺信尼の生誕が聖人の末法觀を强く刺戟してその紀年を立てられるに至つたものだといはれてゐる。けれどもこの說には疑ふべき點があつて、覺信尼が聖人の長子ならば兎に角末女であることは明かである。覺信尼の上に兄もあれば姉もあつたのであるから、特に末女の生れるに至つて末法を痛感されたとは、聖人の末法觀を餘りに輕く見過ぎた說である。いはゞ文類製作年代の引下說には傾聽すべき點のあることは十分領解することが出來るが、特に元仁元年の現はれてゐることについては疑ひが晴れない。もつと積極的な理由の擧げられぬ限り、容易に元仁元年說を葬ることは出來ないのである。

私見によれば、聖人の文類起草の年時も脫稿の年時も共に明かでないが、元仁元年には殆んどその稿の終りに近いて居たのではあるまいか。元仁といふ年號は、中澤見明氏が史上の親鸞にも注意

されて居るやうに、貞應三年が十一月二十日に至つて改元された年號で、元年は一個月餘りしかなかつた譯である。この年號の記されて居るについて、深く穿鑿をして特別の理由を見出さうといふことは、少し見當外れではなからうか。聖人は草稿本成作後も、絶えずその修正補筆を怠らず行はれたに相違ない。現に化身土卷の本末共にその終はなほ修正補筆すべき餘地が殘されてゐるやうで文類の製作は聖人畢生の大業であつた。而もなほ完成を見ずに殘されたのではなからうか。後序の如きは草本脱稿の後、やゝ年時を經て七十歳の頃に加筆せられたものと見るべきではなからうか。隨つて元仁元年なる文字は初稿の時記されたものが、いつまでもそのまゝで傳へられたと見たいのである。私は年代引下論者の如く、元仁元年なる四字を容易に塗抹し得ないのである。

次には喜田博士の代作說が近頃度々論議に上されたことは、周知のことであらう。代作說の論據となつてゐる後序の訓點の疑議に關しては、論據としては餘りに小さ過ぎるとも考へられる。自分の書いた文章に、しかも正しく漢文として出來てゐるものに訓點を施す場合、一個所讀み誤つて居るといつたところで、訓點を打つ時不知不識の間に誤ることは絶無とはいへない。これが論據となつて、立てられた代作說が、文類が聖人の眞作として疑ふべからざる幾多の有力な內的及び外的の理由を一朝にして根底から破壞し去るには、物足らぬ點が頗る多い。第一文類中の御自釋といはれる部分を一度でも味讀し得た人であるならば、聖人にしてはじめてこの語調あり、聖人なればこそ

この文脈あれと自ら深くうなづく所があるに違ひない。それは決して單なる文章家の文でもなければ、索漠たる論理を辿つたり、煩瑣な法門を羅列せんとする思想家の文でもない。それは生の內面から滲み出るところのいのちの泉を以て記された活文字であつて、その法悅を盛つて一語一語脈々として迫らずにはおかない言葉である。しかも體系の整然として具つて居るなど、到底賣文者流の場ふさぎの作物とは、考へといつても考へられるものではない。

代作者の候補者としては大夫房覺明まで擧げられたのであるが、右の如き文類全體に溢れてゐる雰圍氣は別としても、全卷一個所も天台所依の經典たる法華經を引用しないことや、華嚴涅槃二經の組織的な引用等を到底解明することは出來ない。たとひ論者に一步を讓つて他人が代つて書いたにしても、人に賴んで書いて貰ふのと、人に命じて書かせるのとは非常に相異することを明かにしておかねばならぬ。現存する廬山寺本の選擇集にしたところで、その本文は法然上人が口授して弟子に書かせたのであるが、その故を以て、直らに法然上人を無學とし、代作せしめたと結論を下すことが出來るであらうか。かの選擇集は著者以外の人が記したことは明白な事實であるけれども、決して代作とすることは出來ない。一概に代作の名を以て葬ることは決して出來ないのである。この點は代作論者の反省を待つところである。

聖人は土俗學の研究からいへば、沙彌であるから所謂毛坊主の類と見做されるのであらう。而し

て若し毛坊主に學者などのあるべき筈がないとでもいふやうな豫想があつて、論が立てられたものとすれば、是亦聖人の信念に觸れ得ない罪の致すところと悟つていたゞきたい。代作論に對して私は傾聽せしめる耳を持ち得ないといふの外はない。

要するに法然上人が觀經中心の淨土敎思想を唱道し、一遍上人が阿彌陀經中心の淨土敎思想を鼓吹されたのと前後して、聖人はこの文類によつて大經中心の淨土敎思想を樹立されたのであつて、その思想的全生涯が取りも直さず文類の製作であつたといふことが出來るであらう。而してその著作意志からいへば、別に新らしい法を弘めるためではなく、法然上人によつて開顯された念佛往生の思想の正しい祖述であつたに違ひない聖人が正しき傳統の上に立たんと願ふて居られたことは、他の著述の上から考へて見ても明白な事實である。

聖人は五十八歳の仲夏下旬第五日(寛喜二年)に、聖覺の唯信鈔を寫して居られる。聖覺が唯信鈔を著はしたのは、これより九年前承久三年の八月のことであつた。聖人が始めてこの唯信鈔を見られたのは、何時であるか明かでないが、その書寫の最も古く知られてゐるのが右に述べた寛喜二年である。聖覺と法然上人との關係は松本彥次郎氏の所論の如く(史林第七卷)、師弟といふよりはむしろ同法共鳴者といふべきである。覺如上人が傳繪編纂の際、聖覺を信座に點出されたのもまことに故あることで、親鸞聖人からいつても兄事すべき一先達であつたに違ひない。唯信鈔について鎮

西や西山流では殆んど忘れられたかの如き有樣であるが、信瑞の明義進行集を見ても二個處まで引用してある通り、注目すべき著書である。法然上人門下に於て最も有力な門徒はいふまでもなく信空（法蓮）を中心とする白河門徒であつた。七箇條起請文を見ても、源空の次に信空の署名を見るのである。信瑞はこの信空の門下であるから、進行集の價値も十分窺ふことが出來るのである。所が鎮西西山などの末葉が繁榮したために、この白河門徒の位地は殆んど蔽ひ隱されてしまつたが、後世の歷史が投ずる陰翳を取り除いて實際の形勢を明かにする必要がある。聖人は聖覺に兄事すると共に白河門徒の人々とも親密の關係を保つて居られた。光明本尊に聖覺と信空の眞像を描いて居るのでも、このことは立派に裏書せられる。こゝで少しく傳繪の信行兩座のことを辨じておきたい。傳繪は中澤氏のいはれるやうに確かに眞宗信心繪詞の性質を有して居るのであつて、（史上の親鸞）信行兩座の事蹟の如きも、果してどれだけ史實を含んで居るものか甚だ明かでない。進行集に一念多念の座を分けて彼此混合せずといふから、座を分つといふことはあつたであらうが、傳繪に見えるやうな具體的な事實があつたかどうかは判らぬ。ところで信座に配した人物を見ると信空と聖覺と沙彌法力と聖人の四人である。沙彌法力をこれに加へたのは、何か特別の事情があつたのか、或は法然上人の敎を如說に信じて學問や知識のために煩はされない好典型として點出されたのであらうその聖覺と信空の配せられたについては、或は覺如上人が光明本尊から暗示を得て定められたの

であるかも知れない。少くとも傳繪の信行兩座の根底には、光明本尊との密接な關係が横つて居ると思ふ。聖人が傳寫された唯信鈔の價値は信瑞の引用によつて十分に確められたといつてよい。

聖人が坂東地方經廻中に唯信鈔を傳へて居られるといふ事實は、京都と交通のあつたことが知られる。嘉祿三年七月八月の念佛者餘黨搦出の一件も（民卿御記）、その報道に接して居られたに違ひない。建保五年仁和寺の寶庫から靜遍（亦圓）によつて發見された善導の般舟讃も、やがて聖人の手許に屆けられたに違ひない。文類の上に屢々般舟讃の引用を見るが、恐らく歸洛前に眼を通されてゐたのであらう。聖人は坂東地方に住みながら、京都敎界の動靜に暗くはなかつたと考へられる。

聖人は七十四歳の三月十五日（寛元四年）に、はじめて隆寛の自力他力事を寫して居られる隆寛は皇圓阿闍梨の甥であるから、法然上人からいへば師匠の血族である。進行集に律師（隆寛）は法然上人の爲めに天台宗には同法なり、ともに皇圓に傳受するがゆへに、淨土宗には弟子なり、後に依附するがゆへに、聖道淨土一轍なることは、まことにも累劫の宿善なりといつてあるやうに、弟子といつても單なる弟子とは見做せない。聖人が假名交り文の誰にも解し易い唯信鈔や自力他力事を寫して、切りに繙讀を勸められた意向を探つて見ても、ひたすら祖述以外に他意の無かつたことが知られる。

聖人は寶治二年七十六歳に至つて初月下旬第一日に彌陀和讃高僧和讃二帖合せて二百二十五首を

書き畢られた。彌陀和讃を普通淨土和讃と稱へて居るが、高僧和讃も詳しくいへば淨土高僧和讃であるから、淨土和讃は實はこの二帖の總稱とすることが出來る。彌陀和讃には建長七年の眞蹟本があるから、高僧和讃の後に彌陀和讃が出來たやうに思はれるが、高僧和讃の奥書を見るとこの二帖は離れぬ關係のあることが知られ、寶治二年に一緒に出來たのが、後に彌陀和讃の眞蹟が亡くなつたので、建長七年本が最も古いものとなつたのであらう。和讃はたゞ繙讀のためばかりでなく、聲を立てゝうたふべきものであるから、謠ひ物の常としてその言葉が次第に變化して行くことは平家物語の異本の多いのでも知られる。和讃の再治校合といふことが古くから傳へられてゐるのも、畢竟この變化の事實を傳へるものではなからうか。聖人は建長七年の十一月晦に七十五首の聖德太子和讃を綴り(八十三歳)、正嘉二年九月二十四日には、更に正像末和讃一帖を脫稿して居られる。その他康元二年二月三十日に出來た百十四首の太子和讃も上宮太子御記(正嘉元年五月十一日書寫、詳しくは拙著上宮太子御記の研究參照)の內容と比較する時は、眞撰とせねばならぬやうである。著述の順序からいつても、文類撰述後はじめてのものが和讃であるが、その內容から見ても文類の上に示された眞實の宗敎原理とその歷史的傳統とを和げて謠ひ物の形とされたもので、文類と兩々相對すべき重大な意義を有する。今こゝではその內容について詳しく述べる遑がないから、和讃の作られるに至つた筋道について私見を立てゝ見たい。

和讃なるものは今様と同じ形式を有する文學で、梁塵祕鈔の法文歌などが和讃發達の一鎖をなしてゐることは疑ひないが、聖人の師事された法然上人には和讃の作が無いのである。聖人とは稍後れた一遍聖になると念佛の和讃（一遍聖繪に據る、一遍上人語錄には別願和讃と名づけて居る）があるが、聖人の和讃は然らばどうして作られるに至つたかゞ一個の疑問である。そこで法然門下で他に和讃の作があつたかといふと、無智の空阿彌陀佛を擧げることが出來る。この人は法水分流記では、天王寺瓦堂本願、多念々佛元祖と注記されて居るが、進行集にも「ふつに人のことを忘れてたゞ稱名をことゝす、まことにこれ多念の純本、專修の棟梁なり」といはれて居る。安貞二年正月十五日に七十四歳で入滅して居るから、聖人よりは十八歳年長であつた譯である。信空も空阿彌陀佛をば「世には無智の人とおもへども、われにおいては然らず、一定權者のふるまひと見る所ある故に、深く歸伏するなり」といつたほどの人物であつた。この空阿が念佛の時の終毎に

此界一人念佛者　西方便有一蓮生
但便一生常不退　此花還到此間迎
婆娑ニ念佛ヲツトムレバ　淨土ニ蓮スヲ生ズナル
一生常ニ退セネバ　コノハナカヘリテ迎ナリ
一世ノ勤修ハ須臾ノホド　衆事ヲナゲステネカフベシ

願ハヾ必ズ生レナム　ユメ〳〵ヲコタルコトナカレ

光明遍照十方世界　念佛衆生攝取不捨

といつたといふ（本文進行集に據る、法然上人行狀畫圖四八にも見えるが、少し違つたところがある）。この中假名交りの部分は明かに今樣の形式で、法文歌としても立派なものである。所がこれ等の文讃をいはへ誦する事その式この上人よりおこれりと見えて居るから、法然門流に於てかういふ形式の誦文が空阿からはじまつたことは疑へぬ。して見ると聖人の和讃も、若し法然門流に於てその先驅を求めるならば、先づこれに指を屈せねばならぬことになる。慈鎭和尙にも四季の今樣があつて有名であるが（拾玉集）、聖人の和讃とはもとより緣遠くもあり、こゝに史的關係を求めることも出來ぬ。和讃の先驅が空阿のこの文讃であるとしても、兩者を比較する時には、聖人の和讃に美文的要素乃至は修辭的技巧の殆んど認められぬのが法文歌や他の和讃とは異なる特色である。聖人の文章は和漢に拘らず自ら成つたものとしか言へぬのであつて、文を練るとか句を案ずるとかいふことは全く超越して、心のまゝに生れたといふの外はない。聖人の思想が眞率純朴であつて微塵も飾り氣を交へぬやうに、その文も全く色艶のないものである。それがためにむしろ音樂に餘程近いものになつて居るのである。三帖和讃が深刻に人の心をひきつけるのも、その言葉の音樂的律調にあるとも考へられる。聖人の著述に於ける二つの大きな峰は以上述べたやうに文類と三帖和讃で

あつて、その他のものは、この二つの峰の麓をとりまく大小の丘のやうである。

八十三歳(建長七年)から後は樣々の著述にいそしみ筆硯に親まれたが、その頃から坂東門侶の間に於て慈信房善鸞が小羊のやうなうぶな人々の心をかき亂したり、さては鎌倉に於ける念佛の訴へといふやうな事件が持ち上つて來たので、聖人は迷路にさまよふ人々のために心を碎かれたことゝ思はれる。聖人の書簡消息の傳へられてゐるのも、この頃から後であつて、敎團にとつては由々しき秋が來たのである。建長七年の四月二十三日に一念多念分別事を寫して居られる。これも隆寛の著作であるが、門侶の人々に讀ませるために書いて送られたのである。その年六月二日には尊號眞像銘文(略本)、七月十四日には淨土文類聚鈔、八月に入ると六日に三經往生文類(略本)、二十七日に愚禿鈔といふ風に續々著はされて居る。

この中銘文は光明本尊上下の銘の釋文であつて、尊號の銘によつて眞宗本尊の意義を明かにし、眞像の銘によつて、眞宗の正しき傳統を提示する。その內容からいふと淨土高僧二帖の和讃と密接に相通ずるところがある。淨土文類聚鈔は敎行信證の內容が餘りに廣漠であるから、その精要を略抄したもので、敎行信證を廣文類と稱するに對して普通にこれを略文類と呼ぶ。卽ち敎行信證の縮寫で、蓮如上人が「この書(敎行信證)あまりに廣博なるあひだ、末代愚鈍の下機にをひてその義趣をわきまへがたきによりて、一部六卷の書をつゞめ、肝要をぬきいでゝ一卷にこれをつくりて、す

なはち淨土文類聚鈔となづけられたり」(敎行信證大意) といつて居られる通りである。三經往生文類は彌陀の淨土に往生すべきことを敎へる三經が各々異つた過程を取ることを明かにし、その原因と結果とを明瞭ならしめるために經釋の文々類聚したもので、敎行信證の中から特に三願三經三往生の文を抄出して、眞實の道に歸する指針を示したものである。愚禿鈔は上下二卷に分れてゐるので、後世二卷鈔とも呼ばれて居るが、上卷に於ては二雙四重の範疇を設けて、一代佛敎を批判し、本願圓頓一乘に歸入すべきことを說き、下卷に於ては善導の三心釋を諸方面から分解して、自力を離れて絕對他力の信仰に歸すべきことを力說して居られる。その表現の方法は餘程特色をもつてゐて說明省略の叙述法で思想の骨子のみを示し、他力信仰のタアフエルンともいふべきものである。而してその他力信仰が、法然上人の精神から出て居ることを鮮明ならしめるために卷頭に、賢者の信を聞きて、愚禿の心を顯はす、賢者の信は外は賢にして內は愚なり、愚禿が心は外は愚にして內は賢なりと告白してあるなど、聖人の宗敎が理知的な或は衒學的なものでなくて、全く謙虛な敬虔な體驗より流れ出て居ることを深く感せしめる。これらの著作は夫々異つた性質をもつてゐるが、畢竟敎行信證の要領を示したもので「聖人(法然)の御弟子にて候へども、やう〳〵に義をもいひかへなんどして、身もまどひ人をもまどはかしあふて候めり。あさましきことにて候なり。京にもおほくまどひあふて候めり。まして田舍はさこそ候らんと心にくゝも候はず」(末燈鈔) といつて

居られるやうに、特に坂東地方の文字も辨へぬ人々の間には、つまらぬ事から動搖が起つたり、噂が噂を生んで附和雷同する者も少くなかつたので、心と筆を盡してかくも樣々の形で著述しなければならなかつたのである。その所說はもとより敎行信證の外には出ないが、已むに已まれぬ門侶の有樣を見て續々筆を染められた譯で、これらの著述の一つ一つにやるせない老の涙を宿して居るのである。

翌建長八年は晩年に於ける傷ましい出來事の起つた事である。それは外でもない、一子慈信房善鸞の勘當であつて、正月二十九日の日附で慈信房と門侶の代表者性信房に宛てゝ「今は親といふことあるべからず、子とおもふこと思ひきりたり」と申し送つて居られる。まことに聖人にとつて、「かなしきこと」であつたに違ひない。現存する聖人自筆の名號を通觀するのに

(一) 本派本願寺藏六字名號 (康元元年十月二十八日)

(二) 專修寺藏十字名號 (八十四歲書之)

(三) 同 藏八字名號 (八十四歲書之)

(四) 妙源寺藏十字名號 (康元元丙辰十月二十八日書之、八十四歲書之)

等何れも、同年のもので(十月五日改元)ある。私は善鸞勘當の一件とこれらの眞蹟名號との間には離るべからざる關係が潛んで居るのではなからうかと思ふ。私は決して聖人が名號を書かれたの

はこの年にはじまると主張するのではないが、少くとも現存する眞蹟の名號が何れもこの年に屬するといふことには、探らるべき理由があると思惟する。思ふに善鸞が坂東の地方に於て、夜中ひそかに聖人より傳法相承したといひ觸らし、或は第十八願を萎める蓮に喩へるといふやうな素直な門侶の心をかき亂すことを說き宣べたものであるから、遂に聖人の悲痛な勘當となり、淨土眞宗の歸依の對象が名號にあることを明示するために、特にこの年に認められた名號が多いのではなからうかと推察する。この年に於ける聖人の著述は如何といふに、三月二十三日に入出二門偈を著し四月十三日に四十八誓願を執筆して居られる。前者はこれ天親曇鸞の眞精神を發揮せんがために作られたもので、淨土論及び論註に現はれてゐる五念門は本來法藏菩薩の所修であり、吾々の入出二門は如來の勞苦の結果吾々に惠まれたもので、入出二門を他力と名くといふ本偈中の語に全く要約せられるのである。後者は大無量壽經の四十八願を抄錄して、これに訓點を施したものであるがその訓點には聖人獨特の識見を窺はしめるものが少くない。なほこの年の十月より十一月に亙つて西方指南鈔に筆を染めて居られる。この鈔は聖人の著述であるか、或は他に著者があつてそれを寫されたものか確かでないが、研究を要すべきもので、漢和語燈錄編纂以前に法然上人の言行を纏めた書として注目すべきである。本書は法然傳研究には參考に資すべきものゝ一であつて、悲痛な思ひを抱きながら老の涙を拭ふて靜かにかくの如き書に筆を染められた聖人の心境を偲ぶに足る。

翌康元二年の歳首から聖人は舊臘書寫の西方指南抄を校合し、上本の補寫など行つて居られる。即ち正月一日に上末を校し翌二日に上本を書き中本を校して居られる。世事を超越した聖人の俤がほの見えるやうである。

同年正月二十七日に唯信鈔文意を、二月十七日に一念多念證文を著はして居られる。前者は聖人の兄事された聖覺の著書唯信鈔所引の經釋の要文に就いて、註解を試みられたもの、後者は同じく隆寛の著書一念多念分別事に引かれてゐる經釋の證文を抄錄し、それに猶數文を加へて註解せられたものである。聖覺隆寛の著書は後世物語等と共に聖人が消息の上に屢々繙讀を慫慂されたものであるが、何れも門侶間に於ける異義邪說の蒙を啓いて法然上人相傳の念佛往生の思想を明かにせんとするに外ならぬ。兩書とも卷末に「ゐなかのひとびとの文字のこゝろもしらず、あさましき愚癡きはまりなきゆへに、やすくこゝろゑさせむとて、おなじことをとりかへし〳〵かきつけり。こゝろあらむひとはおかしくおもふべし。あざけりおもふべし。しかれどもそのひとのそしりをかへりみず、ひとすぢにおろかなるひと〴〵をこゝろえやすからんとてしるせるなり」と記されてゐるので、著作の動機を窺ふことが出來る。これ法然上人の宗敎の正しき傳統を鼓吹せむとするより外に何等の目的も無いことが知られる。この二書の著述年代については種々の說があるが、聖人は幾度も書寫して門侶に示されたのであるから、實際は何れに定めることもむつかしい。聖人が自著にも書寫の文

字を用ひられたのは、卽ち幾度も書き寫されたことをよく立證するのである。

同年三月二日には再び三經往生文類を著はされた。建長七年製作の本に對して、これを廣本とする。廣略何れとも敎行信證略抄の性質を有するが、略本が眞假の批判を避けて、眞實の四法を提示するに對して、廣本は三種の往生の眞假批判を簡明に指示する。閏三月二十一日には如來二種廻向文を著はされた。これは往還廻向文類とも呼ばれるもので、淨土論によりて二種の廻向あることを擧げ、往相廻向に行信證の三あることを明かにするものである。この書の製作年代は專修寺に傳へる眞蹟本によつたが、三河上宮寺所傳の本による時は、この前年十一月二十九日に既に作られてゐたやうである。蓋し八十四歳の時に稿成り、八十五歳の時更に書寫を重ねられたのであらう。八十八歳の時卽ち文應元年十二月三日に、彌陀如來名號德が出來て居る、この書の內容は正しく唯信房宛の聖人の返信に「人々の仰せられてさふらふ十二光佛の御ことのやう」を書き記したといふのに一致するもので、はじめに阿彌陀如來の十二光について一々簡明な解釋を施し、十字九字の尊號の德に結歸する。聖人の著述の中で年代の明かに知らるゝものゝこれが最後で、恐らく聖人絕筆の書であらう。

この他年代不明のものに善導和尙言があり、漢文の聖敎を拔萃して延書にした往生要集云、二河譬喩文などが知られてゐる　なほ坂東の門侶や聖人の血族に宛てゝ出された消息書簡全部で四十二

通だけが傳へられて居る。末燈鈔、御消息集、血脈文集等夫々必要に應じてこれらの消息書簡を編纂したものである。これらの著述を通じてその形式的の方面から少しく觀察すると、聖人の著述の上には前代に盛行した乎古止點の跡を絶つてゐる。本來乎古止點なるものは、傳授を尊重するために發生したもので、多少とも祕密の性質を帶びたものであるが、鎌倉時代の新佛敎になると、殆んど乎古止點を用ひなくなつてゐる。聖人もこの乎古止點から解放された一人であつて、いはば聖人の著述は民衆の眼前に公開されて居るのである。但し漢字音の四聲や淸濁點の嚴重に施されてゐるところからいふと、聖人の素養が悟ばれるのであつて、さすがに文章の家柄の血は爭はれない。

聖人は淨土三部經をはじめとして、論疏の一部を假名交り文に改め、所謂延書なるものをしきりに試みられてゐる。これはその敎化を民衆的ならしめるためには最も有效であつたに相違ない。和讃になると更に用語の左に訓を添附して居られる。これなどは淨土眞宗が民衆的の宗敎であることを遺憾なく發揮して居る。菅原爲長が尼將軍のために貞觀政要を假名交り文に改めたといふ事蹟などゝ考へ併せて、聖人の宗敎が如何に時機相應のものであつたかゞ知られる。少くともこれらの點は、聖人の著述を形の上から見て最も著しい特色とせねばならぬであらう。(完)